

「読むこと」領域における内容を的確に捉える力の育成（第二年次）

—構造図を用いた作品の評価活動を通して—

長期研究員 神野 杏樹

《研究の要旨》

本研究では文章中の根拠を明確にして自分の考えをもつ力を「内容を的確に捉える力」とし、その力の育成を目指した。文章の構造を把握するために生徒一人一人が構造図を作成した後、その構造図を用いて文章に対して評価を行う学習活動を設定して、授業実践を行った。その結果、文章全体の構造や段落相互の関係を的確に理解し、根拠と理由を明確にした評価を記述できた生徒が増えた。

I 研究の趣旨

令和3年度全国学力・学習状況調査中学校国語科の「読むこと」領域における本県の正答率は48.1%であった。これは、国語科の各領域の平均正答率の中で最も低い。特に、その中で、「文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつ」問題の正答率が最も低く、19.7%であった。この問題の誤答を分析すると、「文章の中から表現を適切に引用していない」解答が、45.3%を占めており、考えの根拠となる情報を明確にすることができていない生徒が多いことが分かる。また、ここから、中学校学習指導要領解説国語編「精査・解釈」の「文章の構成や論理の展開が分かりやすく適切なものであるか、読み手の共感を得るために有効であるかなどを根拠に基づいて判断し、その意味などについて考えること」の充実が十分に図られていないことも考えられる。以上のことから、文章構成や論理の適切さや有効性などを文章中の根拠を基に判断、評価できるようになるための授業改善が必要であると言える。よって、本研究では、文章中の根拠を明確にして自分の考えをもつ力を「内容を的確に捉える力」と定義し、その力を育成したいと考えた。

第一年次の研究では、図表のある文章について、筆者の意図を考える学習活動を設定した。実践においては、根拠となる叙述と図表を結び付けることで、内容の理解が深まり、図表へ着目しようとする姿につながった。しかし、図表と関連のある叙述にしか着目していない生徒も見られ、文章全体を踏まえて考えることができるようにする手立てが必要であると考えた。

そこで第二年次の研究においては、文章の一部のみではなく、文章全体の構造を把握した上で作品の評価を行う学習活動を設定する。まず、文章全体の構造を把握することによって、筆者の主張や強調したい内容、筆者の論の展開のよさを捉えることができるようにする。次に、文章全体の構造が、筆者が最も伝えたい主張にどのように関連しているか、主張を伝える上で有効であるか

を生徒に考えさせる。その際、作品の構造図を生徒自らが作成し、それを用いて評価活動を行うこととする。これらの活動を通して、「内容を的確に捉える力」の育成を目指す。

II 研究の概要

1 研究仮説

「読むこと」領域において、以下の手立てを講じれば、「内容を的確に捉える力」を育成することができるであろう。

【手立て1】要点を捉えるための構成図づくり

【手立て2】段落相互の関係を捉えるための構造図づくり

【手立て3】評価の根拠・理由を明確化する場の設定

2 研究内容

(1) 【手立て1】要点を捉えるための構成図づくり

段落ごとの要点を図として一目で把握することができるようにするために、段落ごとのキーワードを挙げたり、中心となる文同士を組み合わせたりして構成図にまとめさせる。さらに、段落のまとまりを意識して文章を読むことができるようにするために、話題の移り変わりや序論・本論・結論の区切りを自分で判断させる場を設定する。

(2) 【手立て2】段落相互の関係を捉えるための構造図づくり

段落相互の関係をさらに理解させるために、段落同士を線でつないで関係性を整理し、図式化する構造図づくりを行う。また、文章の構造には筆者のどのような意図があるのかについて、構造図を参考に考えさせることで、事例と主張のつながりを具体的に考えることができるようにする。

(3) 【手立て3】評価の根拠・理由を明確化する場の設定

段落相互の関係を把握したことを基にして、文章の構造は読み手の共感を得るために有効であるのかについて

自分で判断する評価活動を設定する。その際、なぜそのように評価したのか、文章全体の構成を踏まえて文章構成を根拠として示すようにさせる。そうすることで、根拠を明確にして自分の考えをもつことができるようにする。その後、評価の根拠、理由がより説得力をもつように、グループでの交流によって評価を検討させる。その上で、評価を再考、再構築させる場を設定することで、根拠、理由がより明確になるようにする。

3 研究の実際

対象生徒 第9学年75名（3学級）
 授業実践Ⅰ「作られた『物語』を超えて」（7時間）
 授業実践Ⅱ「人間と人工知能と創造性」（5時間）

本稿では、授業実践Ⅱを中心に述べる。授業時数全5時間を、以下の図1のように構想した。

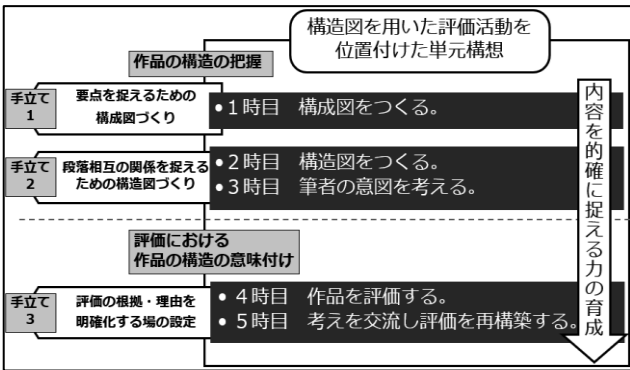


図1 単元構想図

(1) 【手立て1】について

① 構成図を機能させるための工夫

授業実践Ⅰでは、構成図にまとめる際、段落のほとんどを書き抜くような長文を書く生徒が多く見られた。それは、段落の中心を読み取ることができないためである。実践Ⅰで明らかになった課題の解決に向け、授業実践Ⅱでは、段落の中心を見付ける手がかりとして、各段落の要点をまとめる前に、「取り上げられている事例」と「筆者の主張」は何かについて考えさせた。これにより、事例のキーワードや主張の言葉を手がかりにして、どのような内容がどの段落に書かれているのかを整理しやすくなった。

② 構成図の作成

主張及び事例の内容を捉えさせてから構成図の作成を行ったため、段落の中心となるキーワードに着目することが容易になった。そのため、長文を書いた構成図は見られにくくなった。さらに、生徒は、キーワードに端的に説明を補足するなどの工夫をして、短い言葉で要点をまとめることができた。構成図をまとめたことで、段落の内容のまとまりが明確になり、序論・本論・結論の

区切りを自分で判断することができた（図2）。

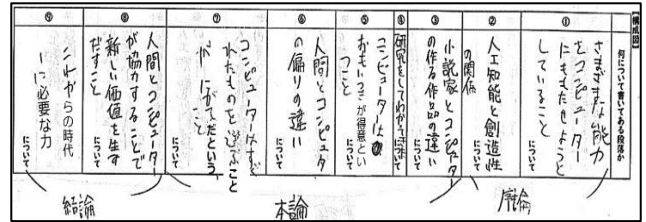


図2 構成図にまとめた各段落の要点

(2) 【手立て2】について

① 構成図の作成

2時目に、構成図でまとめた各段落の要点を参考にしながら、段落相互の関係を捉えるために構成図を作成した。構成図の作成の前に、並立の関係、対比の関係、具体と抽象の関係など、段落同士はどのような関係で表すことができそうか考えさせた。その後、それらを参考にしながら、段落相互の関係性について線や記号を用いて図式化した。その際、付箋紙を用いて、本文の叙述を用いながら関係性の説明を具体的に書き加えた（図3）。

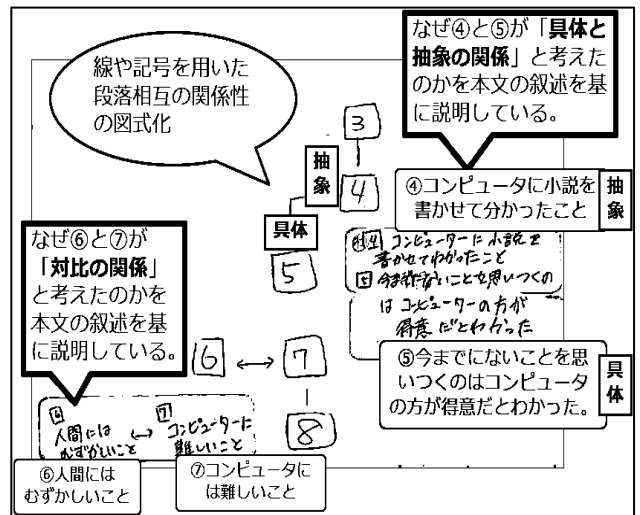


図3 構成図における段落相互の関係性の説明

構成図の完成後、自分の構成図についてペアで説明を合した。自分とは異なる考えに触れることで、本文の叙述をもう一度見直し、修正したり、説明を書き加えたりして、よりよい構成図をつくることができた。

② 文章の構造における筆者の意図の解釈

3時目に、自分の構成図を基に、文章の構造の特徴や筆者がなぜこのような文章の構造にしたのかを考えさせた。生徒は、「人間と人工知能のそれぞれの短所が対比関係で述べられている」、「人間のできるものが後に書かれている」という構造の特徴に気付くことができた。その後、筆者の主張を関わらせて、その構造にした筆者の意図を考えさせた。その後のペアによる交流では、「もし、事例を説明している段落がなかったら」、「もし、人工知能のできるものが後に書かれていたら」と仮定しながら考えを深

める姿も見られ、構造の意図や意味を多面的に理解することにつながった（図4）。

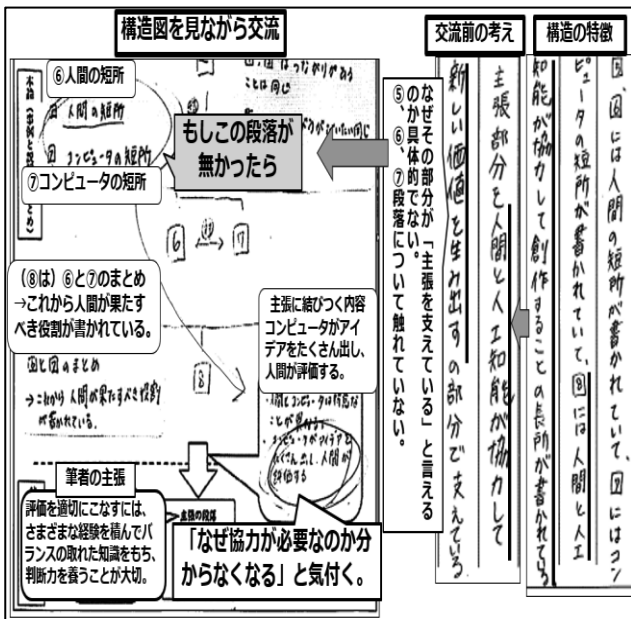


図4 交流前の考えと構造図を使った交流

この交流をすることによって、個人で考えたときには具体的でなかった事例と主張の結び付きについて、どの内容が主張に結び付いているのかを明確にできた（図5）。

(3) 【手立て3】について
① 文章の構造を評価する活動

4時目に、前時で明確にした文章の構造の特徴や筆者の意図を踏まえ、筆者の論の展開の仕方が、読み手の共感を得るために有効であるかどうか評価する活動を行った。このとき、【手立て2】で根拠として着目した文章の構造の特徴が有効か、有効でないかその理由を明確にした上で評価をさせた。生徒が書いた評価を見てみると、具体的な根拠を示していなかったり、根拠を基にそう考えた理由が書かれていなかったりした。それを受けて、書いたもののどの部分が根拠、理由、自分の考えに当たるのか色分けして示し、自分の考えを支える要素としてどのようなことを付け加える必要があるのかを振り返ることができるようにした。それにより、自分に足りない部分を補うために友達と見比べたり、それまでに学習した構成図や構造図を見返して、構造の特徴について再確認したりする姿が見られた。

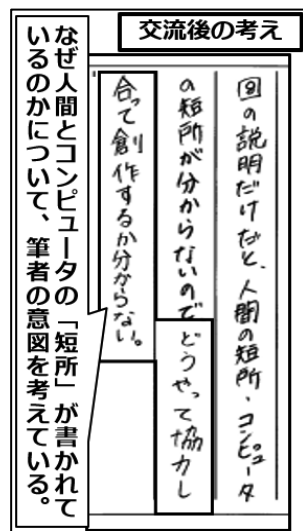


図5 交流後の考え

② 評価の再構築

5時目には、前時にまとめた評価の根拠、理由がより明確になるように、グループで交流した。グループは、同じような根拠を挙げて評価をしている生徒同士、「有効でない」と評価した生徒同士など、3、4人ずつ授業者側で意図的にグルーピングした。自分が着目した構造の特徴における筆者の意図を、「(筆者は)人間の長所のみを強調したかった」と考えていた生徒は、交流によって結論部分に着目し、新たに「(筆者は)人間と人工知能のどちらの良いところも理解できるように書きたかった」と捉え直すことができた。交流によって、全員が前時にまとめた評価よりも根拠、理由を具体的に示した評価に再構築することができた。

III 研究のまとめ

1 「内容を的確に捉える力」の育成における分析と考察

(1) 確認テストによる分析

文章中の根拠を明確にししながら自分の考えをもつ力の高まりを調べるために、2回の授業実践の事前と事後にそれぞれ確認テストを行った。論説文^{※1}を読んで「筆者は主張を伝えるにあたって、どのような工夫をしているか。また、あなたはその工夫をどう思うか」について記述させた。その際、記入においては根拠、理由、自分の考えの三つの条件^{※2}を提示した。

- ※1 授業実践2回、それぞれの事前と事後の計4回実施した。4回のテストではそれぞれ別の論説文を用いた。用いた文章は日本語文章難易度判定システム (<http://jreadability.net/>) でリーダビリティ値2.3~2.7の難易度のものとした。
- ※2 条件1：筆者が主張を伝えるためにどのような工夫をしているか。
(「根拠」となる部分)
条件2：条件1で書いたものは筆者の伝えたいことに対して有効か有効でないか。(評価：文章に対する自分の考え)
条件3：条件2と思った理由は何か。

この問題は4点満点で、条件1、条件2をそれぞれ1点ずつとし、根拠と自分の考えのつながりを具体的にしている条件3を2点とした。条件3は、理由として記述されているもののうち、主張を伝える上で有効である理由が具体的であるものを2点、「図表にすると数値が見やすい」、「事例が身近でイメージしやすい」などの主張に関係のない理由を1点として採点した。

その結果、実践開始時と実践終了時には、有意な得点の上昇が見られた ($p < .05$) (図6)。

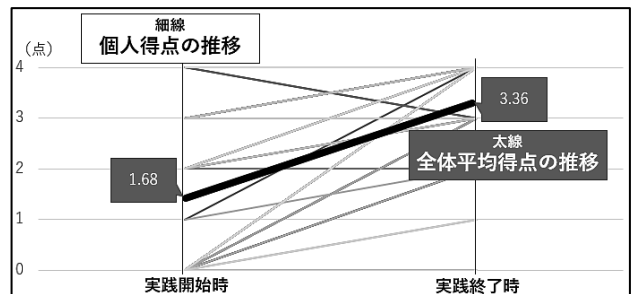


図6 確認テストの得点の推移 (n=60)

この結果より、根拠と理由を明確にしながら文章に対する自分の考えをもつことができた生徒が増えたと考えられる。さらに解答類型からも、実践Ⅰ終了時よりも実践Ⅱ終了時の方が、根拠、理由、自分の考えのすべてを書くことのできる生徒の割合が増え、無解答が減少したことが分かった。一方で、根拠と自分の考えを書くことができるものの、理由が十分に書けていない生徒が約3割いるということも明らかになった(図7)。

解答類型	実践開始前	授業実践Ⅰ事後	授業実践Ⅱ事後
条件1,2,3を満たしているもの(完全)	9%	36%	60%
条件1,2を満たし,3を満たさないで解答しているもの(理由が書けていない)	10%	5%	32%
条件1,3を満たし,2を満たさないで解答しているもの(自分の考えが書けていない)	18%	16%	2%
条件2,3を満たし,1を満たさないで解答しているもの(根拠が書けていない)	1%	0%	0%
その他	22%	10%	4%
無解答	40%	33%	2%

図7 確認テストの解答類型

(2) 構造図作成の有効性の分析と考察

構造図作成と、生徒の評価活動の関係性を調べた。生徒Aが2時目に作成した構造図では、3段落目から7段落目が事例の具体的な内容で、8段落目とそのまとめであると整理している。その生徒Aが5時目にまとめた評価を見ると、構造図に整理したことを用いて、根拠を具体的に示していることが分かる。また、事例と筆者の主張とのつながりを考えることによって、筆者の主張を自分の言葉で捉え直す記述も見られた(図8)。

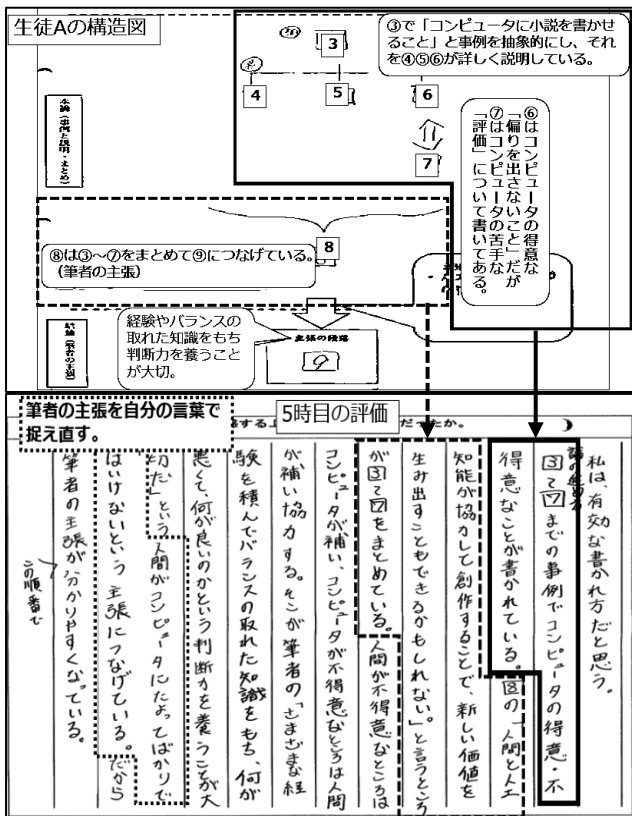


図8 生徒Aの構造図と評価の分析

このように、構造図で段落相互の関係を図式化することによって、それぞれの段落の役割を捉えて、考えの根拠に着目することにつながり、事例を踏まえた筆者の主張も捉えることができたと考えられる。さらに、構造図作成で身に付けた文章理解の仕方を、初めて読む文章でも生かしている。生徒Aの実践後の確認テストの記述を見ると、構造図で整理したように、段落を内容ごとのまとまりとして捉え、段落相互の関係を明確にしている様子が見られた(図9)。

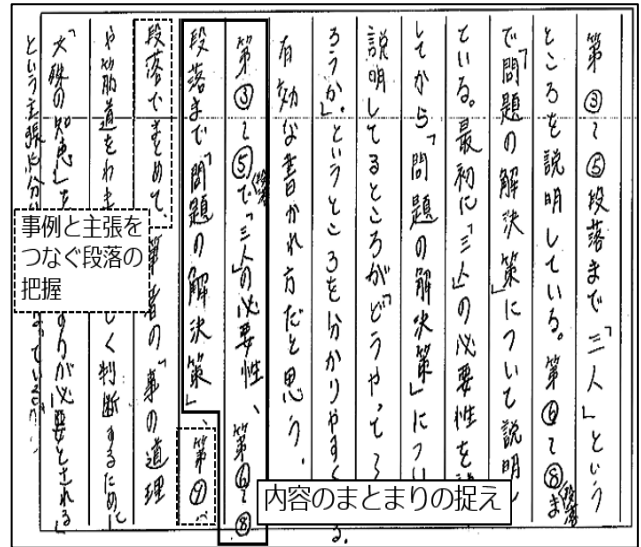


図9 実践後の確認テストにおける生徒Aの記述

以上のことから、構造図の作成は、段落相互の関係を整理する視点を獲得させ、事例を踏まえた筆者の主張を捉えることにつながるといえることが分かった。

2 成果と課題

(1) 研究の成果

構成図、構造図の作成の有効性と共に、生徒のよりよい評価活動にとって、文章全体の構造や段落相互の関係を具体的に考えることの重要性を改めて確認できた。

また、初読の文章においても、文章の構造を把握することは、段落相互の関係や事例と筆者の主張の関係を考えることに活用できることも明らかになった。

(2) 今後の課題

確認テストの解答類型より、考えの理由を明確にできない生徒が3割を占めた。実践においても、理由を具体的に書くことができない生徒が多かった。自分の考えのよりよい形成のためにも、構成図と構造図を有機的につなぐことで、本文の叙述に対してさらに具体的に吟味、検討できるような工夫を考えていきたい。また、日々の学習の中で「なぜそう考えたのか」という理由を具体的に考えさせる学習活動を取り入れていくことで、初読の文章においても、理由を明確にできるように指導していきたい。